

お薬のしおり

No.234 (2021.12)

東京医科大学病院 薬剤部

監修：東京医科大学病院 炎症性腸疾患(IBD)・良性腸疾患センター

下痢とお薬について

だんだんと寒い季節になってきました。風邪などの症状も心配になりますが、おなかの調子をくずして下痢をしてしまうことも…。下痢になると、お手洗いに行く回数が増え辛い経験をした、という方もいるかもしれません。今回はそんな身近な症状である下痢とそれに対するお薬について紹介します。



【下痢の種類について】

下痢はその病態から、大きく分けて「浸透圧性下痢」、「炎症性下痢」、「分泌性下痢」、「蠕動運動性下痢」の4つに分類され、それとは別にお薬によって起きる副作用としての下痢があります。

①浸透圧性下痢：摂取した食事やお薬により腸からの水分吸収が妨げられ、便の水分が多くなり下痢になった状態です。食べ過ぎ・飲みすぎによる消化不良によっておこる下痢の多くがこれに該当し、通常1～2日で治ります。

②炎症性下痢：腸管に炎症が起こることで腸管内にたくさんの滲出液が滲み出し、便の水分量が増加して起こる下痢です。炎症が起こる原因として、細菌（サルモネラ、カンピロバクターなど）やウイルスなどによる感染症のほか、潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患があります。

③分泌性下痢：腸液（腸から分泌される消化液）の分泌が多量になり下痢となった状態をいいます。腸管内に入った毒素（コレラ菌、赤痢菌など）やホルモン異常などが主な原因です。

④蠕動運動性下痢：腸が食物を運ぶ運動（蠕動運動）が活発になり過ぎて、腸から水分の吸収が十分にできずに起こる下痢です。過敏性腸症候群などによる下痢がこれに該当します。

⑤お薬の副作用による下痢：治療のために使用したお薬により、腸に炎症が起きてしまう、腸の蠕動運動が激しくなる、腸内細菌のバランスがくずれる、などの状態が起きることで発生する下痢です。抗がん剤、抗菌薬、消化器用

薬の一部のお薬などで起きることがあります。

【下痢でお薬を使用する際の注意点】

下痢の原因は様々であり、同じ下痢でも病態によって使用するべきお薬は異なります。特に食中毒や細菌・ウイルスが原因の下痢の多くは、自己防御のためのからだの反応です。そのため、むやみにお薬で下痢を止めると逆に状態を悪化させる可能性があり、お薬の使用には注意が必要です。

○下痢や、下痢を症状とする疾患に使われる主なお薬（当院採用薬）

1)腸管運動を抑制する薬（ロペラミド、ロートエキス）：過剰な腸管の運動を抑制します。

2)収斂薬（タンニン酸アルブミン）：腸の粘膜を保護し炎症を抑えるお薬です。

3)整腸剤（ビオフェルミン、ビオフェルミンR、ミヤBM）：乳酸菌が含まれており、乱れた腸内細菌のバランスを整える作用があります。なお、ビオフェルミンRは抗菌薬が原因で生じた下痢に対して適応があります。

4)高分子重合体（コロネル）：水分を吸収して、腸管内の水分量や腸の運動を調節し、過敏性腸症候群の症状を改善します。

5)クローン病・潰瘍性大腸炎の治療薬（メサラジン、ペンタサ、ヒュミラなど）：腸管の炎症を抑えるお薬です。腸粘膜を修復する薬や、免疫に作用する薬などがあります。剤型は飲み薬や座薬、注射薬など様々なものがあります。

【もし下痢になったら？】

下痢は水分が多く排泄されるため、脱水にならないよう水分や電解質の補給をしましょう。また、おかゆなど消化のよい食事をとり、脂質の多い肉や魚などの消化の悪い食事は避け、アルコールやカフェインなどの腸管を刺激する飲み物も控えましょう。下痢はよくある症状だから受診の必要はない、と思う方も多いかもしれませんが、しかしその背後にはがんや慢性疾患が隠れている可能性もあります。症状が長期間続く場合や、下痢以外の吐き気や発熱などの症状が強い場合、便に血が混ざっている場合などには、病院を受診し原因を調べることをおすすめします。

なお、受診する際には、下痢が始まった日時や排便の頻度、便の性状、最近の食事の内容など、具体的な内容を伝えていただくと、より早期に原因が推定できることもあります。お薬のことで何か疑問点・不安な点などがありましたら、医師や薬剤師までご相談ください。